

『マハーバーラタ』第 13 卷第 1 章の考察

——運命と行為——

中 村 史

はじめに 本稿は『マハーバーラタ』第 13 卷の文学研究をめざすものである。『マハーバーラタ』第 13 卷第 1 章を取り上げ、バラタ族の戦いという『マハーバーラタ』の主筋の物語、すなわち杵物語に属するユディシテイラとビーシュマの対話と、ビーシュマの説く挿話「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」の中で叙述されている *kāla*、「運命」と *karman*、「行為」(業)の関係がどのようになっているかを見、そしてそれによって『マハーバーラタ』第 13 卷第 1 章の構成がどのように読解できるかを考察したい。

「運命」と訳すことのできるサンスクリットの単語には、のちに挙げる研究で述べられているように、*daiva*, *vidhi*, *diṣṭa*, *vidhāna*, *bhāgadeya*, *bhavitavya*, そして、*kāla* 等多くあり、それぞれ意味の範囲が違っている。そのうち、*kāla* は第一義的には「時」(時間)である。四季や天体を含め、生あるもの、ないもの全てを動かし、また、その経過によって確実に生類を変化させ終末に至らしめるものである。そのため、「運命」の意味を帯び、「運命」と訳されることがある。本稿では *karman* との対比を明瞭にするため一貫して *kāla* を運命と訳している。本稿は、*kāla* や *karman* そのものについて明らかにするものではなく、それらについての思想・哲学的な研究に学びつつもまた異なった性格の研究になる。

1. 『マハーバーラタ』の「運命」「行為」についての研究 ここですまず、運命と行為についての 3 つの重要な研究の中から、本稿と関わる趣旨を簡潔に挙げておきたい。シェフテローヴィッツ『インド・イランの宗教における運命の神としての時間』(1929 年)¹⁾の古典的研究の本稿と関連する論旨は、

「運命」の神としての「時」(*Kāla*)の観念はバビロニアから占星術とともにインドに入った。運命の神として展開を遂げ、のち、「死」(の神, *Yama*)のみならず「行為」「業」(*Karman*)にも従属するようになる。『マハーバーラタ』第 13 卷第 1 章は運命の神が行為 (*Karman*)に従属した例である。(要約, 21 頁等)

とまとめることができる。続いて、原実『古典インドの運命観』(1972 年)²⁾では、

(248) 『マハーバーラタ』第13巻第1章の考察(中村)

『マハーバーラタ』第13巻第1章についての言及はないが、『マハーバーラタ』全巻に通ずる運命と行為の性格について次のように述べられている。

『マハーバーラタ』には人間の努力、人為の貴さを高く評価する思想と、これに反し、運命 (daiva, vidhi, kāla 等) の絶対性を説く思想がともに見られる。またしばしば、運命は「業 (karman) の齎すところ、業の結果」、前世の業が時至って運命によって熟すとも説かれている。(要約, 176頁等)

また、ヒル『マハーバーラタにおける運命と人間の行為』(2001年)³⁾では、

『マハーバーラタ』は、人間の行為と運命の問題について、行為の結果を免れることができるとする立場と、できないとする立場の両者を取りつつも、全体としては後者の傾向が強い。その中で、人の死などの不幸と行為が因果関係にあるとした事例の一つとして『マハーバーラタ』第13巻第1章の挿話がある。そこでは、この話を説くビーシュマが不幸(戦争)の原因を行為とすると同時に運命とするという矛盾が見られる。『マハーバーラタ』には、特に悪い行為の結果について運命や神に原因を帰するという特徴がある。(要約, 3, 34-36, 67, 364, 368頁等)

といった指摘、見解が示されており参考となる。以上のような研究において、『マハーバーラタ』の中に運命や行為についてさまざまな説き方が混在していること、両者の関係について折衷的な、あるいは矛盾した説き方をしている場合もあること、『マハーバーラタ』第13巻第1章もその1例であることが述べられている。本稿では、『マハーバーラタ』第13巻第1章の場合には、杵物語と挿話で思想の軸に違いがあり、両者のストーリーをすりあわせた章全体はゆるい統一性によってまとめられていると予測する。

2. 『マハーバーラタ』第13巻第1章の杵物語冒頭および結末の設定 第13巻「教説の巻」(Anuśāsana Parvan)の杵物語は第12巻「寂静の巻」(Śānti Parvan)から続く設定を取っている。本稿の底本とするキンジャワデカル版⁴⁾では、第13巻第1章は第1-83偈である。帰敬文(キンジャワデカル版:第13巻第1章第1偈)のあとの冒頭部(キンジャワデカル版:第13巻第1章第1-16偈⁵⁾)と結末部(キンジャワデカル版:第13巻第1章第81-83偈⁶⁾)のストーリーを示そう。

バラタ族のパーンダヴァ家とカウラヴァ家による大戦争のさなか、両家共通の義祖父・ビーシュマが倒れた。ビーシュマは死の床に横たわり、パーンダヴァの長男・ユディシティラに向かって、さまざまな訓戒・説話を説いた。最初に、「バラタ族の戦争によってビーシュマや王たちが死にゆく」と嘆くユディシティラに対して、ビーシュマは「戦争の原因はそなたではない」と言って、昔の物語を語った。…この話を聞き、ビーシュマの教えを聞いたユディシティラは苦悩を忘れた。(要約)

3. 『マハーバーラタ』第13巻第1章の挿話「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」概要 『マハーバーラタ』第13巻第1章の中にある挿話「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」のあらすじは次のようにまとめられる。

バラモン婦人・ガウタミーの息子が蛇に噛まれて死んだ。その蛇を、獵師のアルジュナカがガウタミーの許にもたらし、「蛇を殺せ」と迫った。しかし、ガウタミーはアルジュナカに「蛇を放しなさい」と諭した。ここで、蛇は、「自分は死神 (mr̥tyu) に強いられて子供を噛んだ」と主張し、続いて登場した死神は、「自分は運命 (kāla) の命令を遂行したのみだ」と言った。さらに登場した運命の神が、「この子供は前世になした自らの行為 (業, karman) によって死んだ」と述べるに至って、関係者は全て去って行った。(要約)

4. 『マハーバーラタ』第13巻第1章挿話「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」・関係5者の発言概要 ここで、挿話「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」・関係5者の発言概要を確認しておきたい。まず、死んだ我が子を見たバラモン婦人ガウタミーは何と言ったか。

〈ガウタミー〉最初に「蛇を殺すべきではない、罪を犯すべきではない」(第21-23偈)、「忍ぶべきである。許すべきである」(第27, 29偈)と獵師を諭す。死神と運命の神が順番に登場し、運命の神が「この子供は自らの行為 (業) によって死んだ」と述べたのちに、それを敷衍する発言 (第78, 79偈) をする。

続いて、子供を殺した蛇をガウタミーのもとに運んできた獵師のアルジュナカは何と言ったか。

〈獵師〉「蛇は子供の死の原因であり、罪があり、殺されるべきである」(第37-39, 63偈)と、愚直なまでに繰り返し主張する。

そして、子供を噛み殺した蛇の発言はどうか。

〈蛇〉獵師と死神の追及を受け、責任を回避・転嫁するため、一貫性のない発言を続ける。獵師に対しては、子供を殺したのは「自立的でない自分が死神に強いられてやったことで、罪は自分にでなく死神にある」(第35偈)、「陶器を作る仕事における (道具としての) 棒・轆轤などのように、自らを支配する者でない自分は罪ある者となり得ない」(第40偈)、「陶器という結果について、棒・轆轤が影響を与えあうのと同じであって、(子供の死という結果について、死神と蛇の) どちらが原因なのかわからない」(第41偈)、「死神も蛇も (それ1つに) 罪はなく、罪は第3のもの、(2つを合わせた) 全体にある」(第42偈)、「(死神も蛇も) 原因としては対等で」(第45偈)、「他のものに罪がある」(第46偈)、「祭官による祭式の果報が祭官のものでないのと同じ (子供殺しは死神に命ぜられてやったことであるから、その果報は死神のもの) である」(第48偈)と主張する。死神の登場ののちには、「自分は死神に強いられてやった」(第58偈)が、「そのことと、

(250) 『マハーバーラタ』第13巻第1章の考察（中 村）

強制した死神に罪があるか否かは別問題」と逃避する。死神が「自分は運命に強いられてやった」と主張すると、「運命に罪があるか否か、我々に問う資格はない」（第59偈）、「ともかく自分と死神に罪はない」（第60偈）と、あくまでも自分は子供の死の原因でないと主張する。

さらに、獵師と蛇の議論の場に登場した死神はどうか。

〈死神〉一貫して、「子供は運命の力のままに死んだ、この世のものは全て運命を本質とする」と主張する。「純質、激質、暗質に関わる成分（第52偈）、動植物（第53偈）、諸々の活動（第54偈）、神々（第55偈）その他全て運命を本質とする」、「全ては運命によって作り出され、運命によって滅ぼされる」（第56偈）と述べる。

最後に、獵師と蛇と死神の議論に加わった運命の神はどうか。

〈運命の神〉「子供の死は子供自身の行為（業）のなせるわざである」と述べて、議論を終結させる。「人は自らのなした行為（業）（の結果）に遭遇する」（第74偈）、「影と光が分かちがたく結び付いているように、行為と行為のなし手は（過去世の）自らの行為に結び付けられている」（第75偈）と厳かに述べる。

このように、ガウタミーと蛇と獵師、死神、運命の神と登場人物が加わるに従って、子供の死の原因は蛇でなく死神、死神でなく運命（の神）、運命でなく子供自身の行為（業）と議論が進み、結論に至る。しかし、この挿話の中では、第78偈のガウタミーの発言が若干調和を乱している（後述）。

5. 『マハーバーラタ』第13巻第1章挿話「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」——運命と行為についてのガウタミーと獵師の対話 挿話「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」の中で、運命の神が、子供の死は子供自身の行為が原因であると述べたとき、ガウタミーはその考えを受け入れて言う（キンジャワデカル版：第13巻第1章第77偈）。

（運命が）このように語ると、バラモン婦人ガウタミーは、王よ、世界（生類）を自らの行為に決定されるものと考えてアルジュナカに言った。（*tasmims tathā bruvāṇe tu brāhmaṇi gautamī nṛpa/ svakarma-pratyayāḥ lokān matvārjunakam abravīt//*）

また、言う（キンジャワデカル版：第13巻第1章第78偈）。

このこと（=子供の死）については、運命も蛇も死神も原因ではありません。この子は自らの行為（業）によって、運命によって、死に至ったのです。（*naiva kālo na bhujago na mṛtyur iha kāraṇam/ svakarmabhir ayaṃ bālaḥ kālena nidhanaṃ gataḥ//*）

さらに、言う（キンジャワデカル版：第13巻第1章第79偈）。

私もまたこの私の息子を死なせる行為をなしたのです。運命はお帰り下さい。死神もまた（お帰り下さい）。蛇を放しなさい、アルジュナカ。（*mayā ca tat kṛtaṃ karma yenāyaṃ me mṛtaḥ sutah/ yātu kālas tathā mṛtyur muñcārjunaka pannagam//*）

ガウタミーのこの3つの発言は、人（生類）が自らの行為の結果を受け止めるものであり、ガウタミーの子供自身も関係者も子供の死を招く行為を（過去において）なしたという、運命の神の意見を復唱・敷衍するものである。ただし、第78偈で「運命によって」と述べられているのは他の部分の趣旨と全く異なっている⁷⁾。

6. 『マハーバーラタ』第13巻第1章の杵物語冒頭——運命と行為についてのユディシテイラとビーシュマの対話 杵物語冒頭で、ユディシテイラは、多くの者に死をもたらしした自らの行為が「運命の怒りに服して」（第7偈）行なわれてしまったと嘆く（キンジャワデカル版：第13巻第1章第7偈）。

実に、私たちとドリタラーシトラの息子たち（=敵方・カウラヴァ家）は運命の怒りに服してこのような恥ずべき行為をなし、どのような世界に赴くのでしょうか、王よ。（*vayaṃ hi dhārtarāṣṭrās ca kāla-manyu-vaśaṃ gatāḥ/ kṛtvedaṃ ninditaṃ karma prāpsyāmaḥ kām gatiṃ nrpa//*）

これに対し、ビーシュマは「その行為の原因は、他のものに支配された自己ではない」と告げて、挿話「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる会話」を説く（キンジャワデカル版：第13巻第1章第15偈）。

そなたはなぜこの行為についての原因を、他のものに支配された自己であると考えなのか、幸い多き者よ。なぜなら、かの行為は感覚器官を超越しているからである。（*para-tantraṃ kathaṃ hetum ātmānam anupaśyasi/ karmaṇāṃ hi mahābhāga sūkṣmaṃ hy etad atīndriyam//*）

この冒頭部では、ユディシテイラの問いに対するビーシュマの答えの意味がわかりにくい。17世紀の『マハーバーラタ』注釈者ニーラカントは、第15偈のビーシュマの答えについて、

「『他のものに支配された』とは、運命（時間、kāla）として現われた神（īśvara）に依拠した（ということ）。そなたはなぜ自己を行為の原因、善悪（の行為）の原因と考えるのか。断じて自己が行為の原因ということはない、という意味である。（*para-tantraṃ kālādṛṣṭeśvarādhinam. ātmānam tvam kathaṃ karmaṇāṃ hetum puṇya-pāpayoḥ kāraṇam anupaśyasi, na kathaṃ cid ātmanah kartṛtvam sambhavatīti bhāvah*）

と註釈している。運命と行為の関係という観点でまとめるならば、自己は運命に依存していて、行為の原因とはなり得ないという説明である。この解釈に従うな

(252) 『マハーバーラタ』第13巻第1章の考察 (中 村)

らばビーシュマの答えは理解しやすくなる。その場合、ビーシュマは嘆くユディシテイラを、「そなたは行為 (=バラタ族の戦争) を運命に支配されてなしたのであるから、そなたが行為の原因なのではない」と同義反復的に慰めたことになる。

7. 『マハーバーラタ』第13巻第1章の杵物語結末——運命と行為についてのユディシテイラとビーシュマの対話 ビーシュマは挿話「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」を説きおわったのち、ユディシテイラに向かって、次のように諭す (キンジャワデカル版: 第13巻第1章第81偈)。

このことを聞いて安らぎを得よ。悲しみにとらわれてはならない、王よ。全ての者は自らの行為に決定された世界に赴くのである、王よ。(etac chrutvā śamaṃ gaccha mā bhūh śoka-paro nrpa/ svakarma-pratyayā lokān sarve gacchanti nrpa//)

この中で、「全ての者は自らの行為に決定された世界に赴く」とあるのは、挿話中のガウタミーの台詞「世界(生類)は自らの行為に決定される」(第77偈)に対応する。しかしビーシュマはそのあとすぐに、次のような全く異なる教えを説く (キンジャワデカル版: 第13巻第1章第82偈)。

この行為 (=バラタ族の戦争) は汝によって行なわれたのではなく、ドゥリヨーダナによって行なわれたのでもない。運命によって王たちが殺されるこの行為が行なわれたと知るがよい。(naiva tvayā kṛtaṃ karma nāpi duryodhanena vai/ kālenaitat kṛtaṃ vidhī nihatā yena pārthivāh//)

ここで、「運命によって行為が行なわれた」とあるのは、杵物語冒頭のユディシテイラの問い(第7偈)と同じ内容である。このようにして見ると、『マハーバーラタ』第13巻第1章杵物語の中では第81偈の「全ての者は自らの行為に決定された世界に赴く」が特異な発言であることが知られる。

まとめ 『マハーバーラタ』第13巻第1章杵物語のビーシュマとユディシテイラの対話は「行為は運命に従って行なわれる」ことを主として述べるものであり、挿話「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」は主として「人は自己の行為の結果を受け止める」ことを述べるものと考えられる。杵物語の中に性格の異なる説話を嵌め込むために、杵物語の側でも挿話の側でもある程度すりあわせがなされたと推測される。たとえば、挿話中の第79偈で、「子供は自らの行為によって死に至った」と述べられた直後、「運命によって」と付け加えられているのは、杵物語全体の運命論的色調、あるいは特にビーシュマとユディシテイラの対話中、第7偈に「運命の怒りに服して」「恥ずべき行為 (=バラタ族の戦争) をなした」、第82偈に「運命によって王たちが殺されるこの行為が行なわれた」とある表現

にあわせて付け加えられた可能性がある。また逆に、杵物語のビーシュマとユディシテイラの対話中、第81偈の「全ての者は自らの行為に決定された世界に赴く」という表現は、挿話の結論、あるいは特に挿話中、第77偈の「世界（生類）は自らの行為に決定される」という表現と整合性を付けようとしたものである可能性がある。

このように、性格の異なる杵物語と挿話のすりあわせが行なわれ、第13巻第1章全体としてゆるやかな統一性がもたらされている。そして、第13巻第1章の中で「運命」と「行為」が混然とした形で共存することになった。

-
- 1) J. Scheftelowitz. *Die Zeit als Schicksalsgottheit in der indischen und iranischen Religion*, Stuttgart, 1929. 2) 『東京大学文学部研究報告 哲学論文集』, 1972年. 3) Peter Hill. *Fate, Predestination and Human Action in the Mahābhārata: A Study in the History of Ideas*, New Delhi, 2001. 4) R. Kinjawadekar (ed.). *Shriman Mahābhāratam with Bharata Bhawadeepa by Nilakaṇṭha*. 6vols. Poona, 1929–1936. 5) キンジャワデカル版では、帰敬文1偈と杵物語の最初の1偈をどちらも第1偈としている。 6) 第13巻第1章の場合、キンジャワデカル版で偈数が83であるのに比べて、批判版での偈数は76であり、相当少なくなっている（プーナ批判版：第13巻第1章第1–76偈、クンバコーナム版：第13巻第1章第1–84偈、ダット訳添付のテキスト：第13巻第1章第1–83偈）。それは批判版では、キンジャワデカル版にある杵物語前の帰敬文1偈がなく、また、ユディシテイラの長い嘆きの台詞5偈がないためである。それ以降の部分においてはこれらの版に大きな内容の相違はない。クンバコーナム版では偈数が84であるが、それは、キンジャワデカル版にはない帰敬文がもう1つあるためである。 7) この点は、前述のヒルの著作等でも指摘されていない。

（平成22年度科学研究費基盤研究（C）による研究成果の一部）

〈キーワード〉 マハーバーラタ, 死神, 運命, 時, 行為, 業, kāla, karman

（小樽商科大学教授, 博士（文学）, 博士（比較文化学））